

公明党土浦市議団

行政視察報告書

視察先	鹿児島県霧島市：シティプロモーションについて 宮崎県小林市：生涯スポーツについて 宮崎県西都市：グリーンツーリズムについて
視察日	令和2年2月4日（火）～令和2年2月6日（木）
参加者名	吉田千鶴子 福田一夫 平石勝司 目黒英一（他 郁政クラブ9名）

視 察 先 鹿児島県霧島市 霧島市役所

視 察 日 令和2年2月4日（火）14:00～15:30

視察目的 霧島市「シティプロモーションの展開と取り組みについて」

「キシマイスター認定制度」の説明を受け、本市における今後のシティプロモーションについて参考にする。

視察内容 シティプロモーションについての説明、質疑応答

説 明 者	霧島市 商工観光部 霧島 PR 課	課長	藤崎 勝清 様
	霧島市 商工観光部 総務企画グループ	グループ長	蔵元 賢一 様
	霧島市 商工観光部 総務企画グループ	サブリーダー	亀石 和孝 様
	霧島市 議会事務局	局長	山口 昌樹 様

霧島市について

霧島市は、平成17年11月7日に、1市6町（国分市、溝辺町、横川町、牧園町、霧島町、隼人町、福山町）が合併し、誕生。鹿児島県本土のほぼ中央に位置し、北部は国立公園である霧島連山を有し、南部は錦江湾に接し、桜島を望む事が出来る。また霧島市は霧島山系から裾野、平野部を経て錦江湾まで流れる清く豊かな天降川、その流域に広がる豊かな田園、そして山麓から平野部まで温泉群を有しており、海、山、川、田園、温泉など多彩で豊かな地域である。面積603.18平方キロメートル。人口125,128人、60,583世帯（平成31年4月1日現在）。

霧島市シティプロモーションの展開と取り組みについて

① 郷土愛醸成 霧島市の魅力発見、磨き上げ、キシマイスターの取り組み

合併後の霧島市の一体感が出来ているか、2016年4月市民130人に調査。「一体感が出来ている」「徐々に一体感が出来ている」が41.5%、「一体感がない」が31.6%「分からない」が26.9%と「一体感が実感出来ていない」は半数以上となりました。

霧島市の魅力が自分たちでもよくわからなくなっている。それを探す、見つけてPRしていく仕組み作りが必要と判断。地方創生交付金を活用し平成28年、29年度に電通へプロポーザル事業を依頼。

そこで3つのキーワードとして

- 1「持続・自走可能か？」内でも外でも使えるフレーム・仕組みが必要
- 2「シビックプライド」市民らが自分たちのまちに誇りを持ってPRできる

3「オール霧島」市民が参加したくなる、参加しやすい、一つになる旗印づくり

このキーワードをもとに2016年褒めて伸ばすが合言葉、善意の認定制度

キラシマイスター認定制度をスタートしました。

人、観光地、お店、サービス、風景など霧島市のいいところを見つけて、褒めて、褒めて、褒めまくる。そして霧島市を承認要求に満たされたまちにしていく。

はじめにキラシマイスターカード15,000枚をイベントや学校、希望者に配布し

キラシマイスター事業の周知に努めました。

2年目の新しい取り組みとして「褒め合うまちへ」を合言葉に、霧島市全員参加の褒め合う

交換日記「ソーシャル日記システム」をスタートさせました。

褒めたいことを書いて、誰かに渡すというルールのもと、霧島市の魅力をたくさん集めました。

3年目は「霧島いいな展」を開催。霧島市の魅力を書いた11,700枚のカードを並べて、高さ4mの巨大なモザイクアートを作成しました。ちなみに、霧島市が誕生した11月7日(いいな)が名前の由来です。

② 認知度向上 霧島市の魅力発信 シティセールスの取り組み

関東、関西の方が「きりしま」と聞いて思い出すものの第一位は焼酎、酒(約50%)

霧島市民の主観的な目線では「霧島市」が全国区であるとの意識は高いが、

関西、首都圏等、距離が離れるにつれ認知度は低くなる。

全国の市町村がライバルとなる観光客、移住者等の交流人口増加のためには認知度向上が不可欠。

観光関連の課題1

湯治文化や別荘文化を持つ霧島市の長期滞在エリアとしてのポテンシャルに反して、霧島市には一泊もしくは、宿泊せずに別のエリアに宿泊する人が多く、二泊以上する人の割合が低い。

観光関連の課題2

霧島市への来訪意向度が低い。同じ九州の観光地である湯布院の半分程度。

解決策

霧島市の独自価値「心と体をトリートメントできる場所」が伝われば、二泊以上の滞在意向が大きくジャンプアップする。

「心と体をトリートメントできる場所」の具体的な内容(観光客の評価ポイント)

1位

源泉かけ流し温泉が多数あり、泉質が多種多様で温泉の効果・効能もバラエティに富む

2位

霧島山（高千穂峰等）から雄大な風景がのぞめる

3位

いつでも家族で安価（400～500円）に楽しめる温泉家族風呂

4位

黒豚、黒酢、美味しい野菜等の食材が豊富

移住関連の課題

「心と体をトリートメントできる場所」という要素にプラスしてまちの「快適さ」「便利さ」という要素を体感してもらう（移住の際の重視ポイント）

1位

交通の便が良い

2位

治安が良い

3位

食べ物が美味しい

4位

自然（山・海）が豊富

5位

医療・福祉などのサービスが整っている

解決策

霧島市の山エリアと里エリアの回遊により、「心と体のトリートメント」と「快適さ」「便利さ」を体感させる。これにより霧島市のファン化→移住の可能性UPをはかる。

③ 霧島ガストロノミーブランド「ゲンセン霧島」認定制度

ガストロノミーとは、健康的な生活と食を通じた喜びを分かち合うための知識、体験、芸術、クラフトを統合した概念のことを言います。

「ゲンセン霧島」とは、霧島の食の方向性である「きりしま食の道10カ条」に沿ったあらゆる商品・サービス・取組・活動を指します。

商品・サービスは販路拡大、収益拡大等を、取組・活動は霧島市の魅力増幅、地域課題解決に繋げ、霧島市全体の活性化に活用していきます。

認定審査は、国内外の専門家が最大7段階の星の数で評価します。

7つ星

駅弁「百年の旅物語かれい川」、坂元のくろず、霧島高原純粋黒豚、岩切美巧堂焼酎タンブラー

きんこうじとん、有村特上煎茶、オーベルジュ異人館、霧島食育研究所の活動

6つ星

霧島燻製ファクトリー無添加ベーコン&ハム、今吉製茶王冠、関平鉱泉水、黒さつま鶏正肉
霧島サーモン、霧島あさり、霧島有機抹茶、ひより保育園食育活動

5つ星

竹筒入り焼酎清香、原木 松下椎茸、空港製茶極上みそべ、霧島散歩茶器、極 野菜、
角まんじゅう、大作の黒さつま鶏、霧島熟成神話豚、霧島さん家のグラノーラ、
きりしまめぐみ 天（西芳香園製茶）、黒豚の黒酢酢豚（福山黒酢）、薩摩すもじの素、

4つ星

大豆ピクルス、ひより味噌プレミアム、えくぼファーム農業体験・食育活動、有機小松菜
（もりやま農園）、霧島日当山の温泉水、べにふうき緑茶粉末+乳酸菌、ばっぱんの味噌煮
きりしまの風 多品目少量栽培、

きりしま食の道 10 カ条

1. 地域性 暮らしの源である霧島山に深い敬意を込め、自然の恵みを共有しよう。
2. 神事・風習と食 天孫降臨の地である霧島の食のルーツを学び体験しよう。
3. 職人氣質 先人達が連綿と築いてきた食の知恵と技、想いを未来に残そう。
4. 地産地消 霧島が育む食材を学び、使い、みんなで楽しく食べよう。
5. 伝統と革新 受け継がれてきた霧島の食文化をいかし、新たな霧島の食に発展させよう。
6. 健康志向 霧島の食材で健康や美に繋がるような食べ方をひろめよう。
7. 環境型 霧島の食を育む山、川、里、海を大切にし、命の循環を守り続けよう。
8. 創造性 ワクワクする新しい食の創造にチャレンジできる霧島をつくろう。
9. もてなしの心 霧島人として、思いやりとまごころで、霧島でしか味わえない食の記憶を贈ろう。
10. 褒め合う食文化 霧島の多様な食文化を互いに認め「褒め合う食文化」を築こう。

④ 「霧島プレゼンテーション」

・都内で霧島の食と温泉を PR プレゼンテーション開催

・公式アカウント開設

キリシマイチャンネル（インスタグラム）、霧島チャンネル（YOUTUBE）

・テレビ放映

テレビ東京「昼めし旅～あなたのご飯見せてください～」

NHK「おはよう日本」

TBS「Nスタ」

- ・霧島市誕生日企画「霧島イイなの日」開催
- ・教育の現場とコラボ「小さなキリシマイスター」が霧島市を PR
(キリシマイスターモデル校 小学校9校、中学校1校を認定)
- ・褒め合う金婚式&銀婚式を開催

⑤ メディア PR 実績

2018 年度

メディアキャラバン 46 社

取材対応 22 社

掲載実績

テレビ 15 社

新聞・雑誌 44 社

WEB 309 社

広告換算 5 億 7,500 万円

2019 年度

メディアキャラバン 17 社

取材対応 12 社

掲載実績

テレビ 7 社

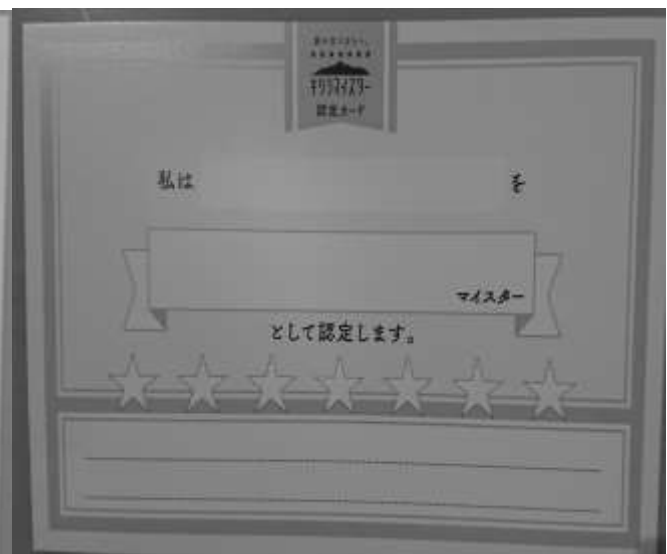
新聞・雑誌 20 社

WEB 160 社

(2019 年 1 月 20 日時点)

キリシマイスター認定ステッカー

キリシマイスター認定カード





サッカーW 杯ブラジル大会に出場した本田圭佑選手が
使用したスパイクの大型モニュメント

(約3メートル)が霧島市役所に展示されておりました。

2020年鹿児島国体で女子サッカーが

霧島市で開催されるため、大会へ向けて機運を高めよう

と、市サッカー協会がミズノと連携して

企画したものです。

2020年10月に開催される第75回国民体育大会「燃ゆる

感動かごしま国体」及び

第20回全国障害者スポーツ大会「燃ゆる感動かごしま

大会」の開催までの残り日数を表示する

カウントダウンボードが霧島市役所内に展示されてお

りました。





主な質疑応答について

Q. シティプロモーションの予算はどのくらいか

A. 平成 28 年度が 5,800 万円（うち地方創生交付金 5,500 万円）、29 年度が 4,770 万円（うち地方創生交付金 2,335 万円）、平成 30 年度が 2,947 万円（うち地方創生交付金 1,450 万円）。今年度からは、市の単独予算として 1,061 万円。28 年、29 年度は電通が入り、コンセプトをプロポーザル事業として行なっている。

Q. 褒め合う文化はどこから発生したのか

A. 地域の魅力を磨き、魅力を上げるために、褒め合うことにつながった。

Q. 今後はどのようにしていくのか

A. 市民の方でもキラシマイスターを知らない人がまだまだいるので、地道に活動を続けていきたいと考えている。今後は委託でなく、自主事業として行なっていきたいと考えている。

Q. 成果について

A. 不登校の子が学校に出ていくようになったなど、褒めることによって様々な効果が生まれていると感じている。

Q. キリシマイスターのロゴの星が 7 つの理由は

A. 霧島市が旧自治体 7 つが合併したことが由来である

Q. SNS での発信はどうしているのか

A. フェイスブックをはじめ、YouTube やインスタグラム「キラシマイチャンネル」で発信している。また、霧島市民全員参加型の交換日記（アナログのソーシャル日記システム）を活用している。

所感について

【吉田千鶴子議員】

霧島市では、市の魅力が自分たちでもよく分からなくなっている。それを探す、見つけて PR していく仕組み作り必要であると考え、

そこで考えられたのが、「褒めて伸ばす」が合言葉の、善意の認定制度「キラシマイスター認定制度」が平成 28 年度からスタート。

キシマイスターは、ドイツ語で名人や達人を意味する「マイスター」にかけた造語です。認定制度は、難しいものではなく、人、観光地、お店、サービス、風景などみんなで霧島市のイイところを見つけて、褒めて、褒めて、褒めまくるだけ。褒め合うことで、市民の郷土愛を高め、地域や市民同士の絆を強くしていくことです。

2年目の平成29年には、世界初！？の霧島市民全員ではじめる褒め合う交換日記がスタート。褒め合う場の具体的事例としては、金婚式&結婚式、教育の現場とコラボ（人権教育）等があります。中でも、教育の現場からの声には、褒め合う取り組みをしてから不登校の生徒がいなくなったという報告があり予期せぬ嬉しい出来事と伺いました。

日頃の生活の中でたくさんの幸せの数が増え、それがまちへの愛着につながり、将来霧島市に住み続けたいという思いにつながっていきますと担当者の方からお話いただきました。

現在は、自己肯定感を持っていない子がいると聞きます。そうした観点からも素晴らしい取り組みであります。褒め合うということは、相手の方をよく見ようとしなければ褒めることは難しいと思います。そうした中で他者を尊重しようとする心が育まれるものと思います。

このように、「人も霧島も褒め合う」素晴らしい事業を本市でも取り組んではいかがでしょうか。提案したいと考えます。

【福田一夫議員】

霧島市のシティープロモーションを支えるのは市民同士が互いに褒め合うキシマイスター制度である。「相手のいいところを見つけ、褒めて、褒めて、褒めまくるべし」の精神は市民の郷土愛を高め、地域や市民同士の絆を強くする効果があるであろう。背景には1市6町が合併したということがある。郷土意識が強く対抗意識があったなかでの新しいまちづくりは課題も多かったであろう。そのような中でキシマイスター制度は有効な制度であると思われる。またその内容がシンプルなのがいいと思われる。認定カードに褒めたい人、店、ものなどを書くだけでよくこのシンプルさが成功のひとつの要因であろう。

また教育現場でも活用されているが、その教育的効果を時間をかけて検証したいと思われる。

この制度が市のシティープロモーションを支えているが、温泉や雄大な自然や豊富な食材など誇れるものが多いのも郷土愛を育む一つの要因であろう。

【平石勝司議員】

霧島市のシティープロモーションの特徴は、「褒め合うまちへ」を合言葉に、平成28年度から「キシマイスター制度」をスタートさせ、市民がキシマイスター認定カードに、相手の褒めたいことを書いて渡すだけというとてもシンプルな取り組みである。その効果として、まちじゅうに明るい笑顔が広がり、教育現場では不登校の子が学校に出ていくことがあった事例もあるとのことで、とても

すばらしい取り組みであると感じた。

また、地方創生交付金を活用し、外部の電通が入り、プロのクリエイターやデザイナーなどが手がけたロゴや動画などもさすがのクオリティである。

シティプロモーションの取り組みの多くは、地域の魅力を市内外に発信し、定住促進や交流人口の拡大につなげていくことを目的としたものが多いが、同市のような切り口での霧島市のファンをつくる、郷土愛の醸成をはかっていく取り組みは大変参考になった。

【目黒英一議員】

<褒めて伸ばすが合言葉の「キシマイスター制度」 たくさんの「いいね！」が街中に広がっています>

霧島市のシティプロモーションの取り組みはこの言葉に集約されております。

「いいね！」の言葉に最初は SNS をメインに使った取り組みだと想像しておりましたが、説明を聞きアナログ感が溢れ、手作り感いっぱいの温かい取り組みだと思いました。

手書きのカードや交換日記などを使い霧島市の良いところ、自慢出来るものを PR する市民参加型のプロモーションは外に向けてだけではなく、自ら霧島市の良いところ自慢出来るものを再確認することが出来て郷土愛も深まる一石二鳥の画期的なプロモーションだと思います。

教育の現場に褒め合う取り組みを取り入れたところ、生徒間でもお互いを認め合うようになり、いじめや不登校の生徒が減ったというエピソードは本当に素晴らしいことだと思います。

また霧島市の褒め合う合同金婚式の映像も拝見しましたが、改めて感謝の言葉を述べ合うご夫婦達に感動を覚えました。

小さなお子さんから年配の方まで浸透させるのは本当に大変だったと思います。

温泉、美味しい食べ物、素晴らしい風景、に加え市民の褒め合う取り組みに私自身も霧島市のファンになりました。そしてこれからは土浦市をもっともっと褒められるように努力して参ります。

視 察 先 宮崎県小林市 小林市役所

視 察 日 R2年2月5日(水) 9:30~11:00

視察目的 小林市の目指す生涯スポーツ

「いつでも」「誰でも」「どこでも」「いつまでも」

スポーツに親しめる環境を整備し、豊かなスポーツライフを実現することで、スポーツを通じた地域コミュニティの推進、計画を参考にするため。

視察内容 生涯スポーツについて

説 明 者 総務文教委員会 委員長 西上 隆 様

小林市教育委員会 スポーツ振興課 課長 税所 将晃 様

小林市教育委員会 スポーツ振興課 主幹 齋藤 康志 様

① 小林市について

小林市は、平成18年3月20日に、(旧)小林市と須木村が合併し、新市政による小林市となる。南九州の中央部に位置し、霧島連山と九州山地に囲まれている。霧島ジオパークや綾ユネスコパークに認定されている自然豊かなまち。

スポーツのまち小林を代表する、全国大会7回の優勝を誇る小林高校駅伝部を始め、バスケットボール、ハンドボール、新体操、ウエイトリフティング等、全国大会で活躍する高校スポーツが多数存在するスポーツ活動の盛んなまちである。

1991年世界陸上男子マラソン金メダル、1992年バルセロナ五輪男子マラソン8位入賞の谷口浩美さんは小林高校駅伝部OB。

面積 562.95 平方キロメートル 人口 43,893 人 (令和2年1月1日現在)



② 小林市にある体育施設

- ・市民体育館
- ・各地区体育館（11 施設）
- ・弓道場（2 施設）
- ・各地区運動広場（8 施設）
- ・各小、中学校体育館（21 施設）

* 夜間（20～22 時）のみ一般開放

- ・小林市総合運動公園 テニスコート（8 面）、市営陸上競技場（第三種公認）、市営野球場、多目的広場、展望広場、市営プール（屋内、屋外）、ジョギングコース、クロスカントリーコース
- ・緑ヶ丘公園 テニスコート（2 面）、市営野球場、集会場（武道場）

2019 年 インターハイ 少年女子バレーを市民体育館で開催

2026 年 宮崎国体 少年女子バレー、ウエイトリフティング、トランポリンを市民体育館で開催予定

2020 年 韓国の高校野球チームの合宿を受入 練習拠点は小林市総合運動公園野球場

③ 小林市スポーツ推進計画

- ・策定の趣旨

国のスポーツ基本法が平成 23 年 50 年ぶりに全面改正され、スポーツに対する考えが大きく変わりました。

「小林市総合計画」（平成 23 年度～平成 28 年度）施策体系「生涯スポーツの充実」

「(1) スポーツ活動の推進」、「(2) スポーツ団体の活動支援」、「(3) 市民体力の向上」

という三つの柱を定めて時代に即した事業を展開する。

体力や競技力の向上を図るだけでなく、生涯にわたって心身ともに健康で豊かな暮らしを実現する上でスポーツは欠かせないものになってきております。

また高齢者の健康づくり、介護予防などスポーツが果たす役割が今まで以上に重要になってきております。一方新たな課題として少子化による児童生徒数の減少により学校単位での部活動の維持が困難になっていることや施設の老朽化が進んでいることから、今後スポーツ環境の計画的な整備も必要になってきます。

さらに 2020 年東京オリンピック・パラリンピック、2026 年宮崎国体にむけての取り組みもあり、今後 10 年間で視野に入れたスポーツ推進計画を策定することは、大変重要である。

- ・施策の大綱

～まなび～ 生涯を通して学び合い育ち合うまち スポーツ・体づくりを推進します

- ・基本理念

スポーツで育つまち小林市 ～真のスポーツのまち小林を目指して～

- ・基本方針

- (1) 生涯スポーツの推進

- ・子どものからだの教育の推進と充実
 - ・高齢者スポーツの推進
 - ・障害者スポーツの推進
 - ・地域スポーツの推進

- (2) 競技力の向上

- ・子どものスポーツの育成、強化
 - ・アスリート支援体制の整備
 - ・スポーツ指導者の育成
 - ・競技団体の組織強化

- (3) スポーツ環境の整備と充実

- ・スポーツ施設の整備
 - ・情報提供の充実

- (4) スポーツツーリズムの推進

- ・スポーツ大会や合宿の誘致

- (5) スポーツ・体づくりに関する食育の推進

- ・食育の充実を図った体づくり

④ スポーツ推進委員の活動

- ・スポーツ推進委員

委員数は26人。各種運動教室の講師をはじめ各種スポーツ大会を成功させるため、運営や補助などを行っている。

- ・主な取り組み

<出前講座> 高齢者学級や家庭教育学級、事業所などに伺い、さまざまな希望に合わせて、スポーツ講座やレクリエーションを開催している。

<ガッツイ運動教室> 毎週火曜日10時から市民体育館で開催。誰でもできる簡単な運動を始めスクエアステップなどのニュースポーツを行っている。

ガッツイとは宮崎の言葉で「ちょうどいい」という意味です。

ストレッチや踏み台昇降運動なども行っています。

<市民スポーツ祭こばやし大運動会>

- ・毎年10月に開催。50回開催している。

- ・園児から高齢者まで約 3,000 人が参加。
- ・小林高校駅伝部や小林秀峰高校新体操部の模範走、模範演技を行っている。
- ・50 回大会にはオリンピック選手の招待を行っている。また駅伝強豪の高校なども招待したこともある。

<市民スポーツ祭こばやし駅弁競争大会>

- ・旧小林市の市制施行記念として始まり、毎年 1 月に開催。現在まで 69 回開催している。
- ・各小学校区の代表らが 14 区間 25.6 キロをタスキでつなぐ。
- ・市内をめぐる駅伝であるため、走る人、スタッフ、応援などを通してスポーツに親しむ機運醸成に繋がっている。

<こばやし霧島連山絶景マラソン大会>

- ・毎年 3 月に開催。
- ・ハーフから 1.5 キロまで 7 種目を実施。
- ・設定時間を遅く設定して、初心者でも参加しやすい大会にしている。
- ・親子などで参加できるファミリー部門を行い、参加者の幅を広げている。

<こばやし霧島連山絶景ウオーク>

- ・毎年 2 月に開催。土日の 2 日間で実施。
- ・コースは 30 キロ、20 キロ、10 キロ、5 キロの 4 部門。
- ・西諸地域に在住、在勤、在学の人を対象に特別割引を行い、市民が参加しやすい大会にしている。
- ・地域住民と連携して日本一のおもてなし（郷土料理のふるまい等）を目指し、市民総出で大会を開催している。

<地域総合型スポーツクラブ>

- ・～こばやし元気クラブ～
会員数は約 150 名。各種スポーツ教室、サークル活動などを実施。
中学 3 年生の部活動を引退した子どもたちを集めた活動なども行っている。
- ・～クラブのじり～
会員数は約 80 名。各種スポーツ教室やサークル活動などを実施。
ウォーキング大会やミニバレーボール大会などのイベントも行っている。

<小林市体育協会>

- ・～各競技団体の市民スポーツ祭～

より多くの市民にスポーツを楽しんでもらうために、市民スポーツ祭の冠をつけた大会を競技団体を中心に開催している。(今年度実績 16 競技 17 大会)

- ・～競技団体が行う教室等をサポート～

競技団体の活動が継続できるように、指導者講習会や各種教室などの開催をサポートしている。(今年度は 2 団体が実施)

- ・～競技力向上事業(予定)～

令和 2 年度からの新規事業。年長から小学校低学年を対象にスポーツの楽しさを知ってもらいスポーツ選択の機会を創出することを目的に開催する。

(対象競技)

陸上競技、ハンドボール、バスケットボール、ウエイトリフティング、新体操、サッカー、野球、トランポリン、バレーボール等

- ・各競技団体と連携して親子で参加できるスポーツ遊びの実施。
- ・市内高校と連携して全国レベルの模範演技、競技の見学
- ・スポーツ少年団と連携して体験した競技をはじめめるための受け皿。





主な質疑応答について

- Q 市内各地区の体育館の規模はどの程度になっているか。
- A 市内にある各地区の体育館の規模は平均して、バレーボールコート2面、ミニバレーコート3面利用可能な規模になっている。
- Q 合宿を誘致するうえでの問題点は。小林市内に宿泊する場合、補助金は出るのか。
- A 宿泊施設が少なく、駅前のビジネスホテルをはじめ、温泉宿泊施設、県のキャンプ場のコテージ、近隣の市町村の宿泊施設を利用してもらっている。宿泊の際の補助金は、市で予算を確保していないので出ないが、合宿所への差し入れや空港から合宿地までのバス運賃の補助金は出している。
- Q こばやし元気クラブの運営はどのように行われているか。
- A 市内外の指導者・団体に声掛けをして指導を依頼している。色々な競技を経験させたり、部活動引退後のスポーツ離れをなくすため参加費は無料。またスポーツ少年団は小学校単位の入団ではなく、どこでも自由に入団できる。

Q ニュースポーツとは。

A 室内ミニテニス、スポーツ吹屋、スクエアステップなど誰でもできる簡単なスポーツ。

Q いつでも自由に利用できる施設がすくないのはなぜか。

A 各競技団体が施設を固定して利用しているため、飛び込みでの利用は難しい。

Q 市民スポーツ祭こばやし大運動会以外にも、各地区ごとの運動会は行われているか。

A 各地区ごとの運動会も行われており、300～400人ほど参加する。

Q 合宿誘致の取り組みについて

A スポーツ振興課、計画政策課が中心に、市役所全ての課が一体になって取り組んでいる。

Q 駅伝や新体操など各種目が小林市に根付くのはなぜか。

A 小中学校では各競技の協会の指導者が指導、高校ではOBが大学卒業後、教員となって高校に戻り、指導にあたることが多い。

所感について

【吉田千鶴子議員】

小林市は、平成29年4月にスポーツ推進計画を作成しそれに則り「いつでも」「誰でも」「どこでも」「いつまでも」スポーツに親しめる環境を整備し豊かな

スポーツライフを実現することで、スポーツを通じた地域コミュニティを推進しています。

スポーツ推進計画の策定の趣旨は、小林市総合計画を上位計画とし、高齢化の進展によりスポーツが果たす役割が重要、一方では、新たな課題として少子化による児童生徒の減少により学校単位での部活の維持が困難になっていること等課題がある。

さらに、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催において本市ができることは何か。小林の将来を担う児童生徒にどのようなことを伝え、遺すことができるか考える。

このようなことから「学び」と「健康」を大切にしながら、生涯にわたりスポーツに取り組む10年間を視野に入れた計画となっています。

本市においても参考としていただき、人生100年時代を障がいがある人もない人もすべての市民が健康で豊かに生活を送るためにもスポーツ推進計画を策定していただきたいと思います。

その中で、合宿誘致推進活動の行い、この度韓国からの受け入れをされると伺いました。

【福田一夫議員】

土浦市に比して少ない人口（45000人）の割に、広大な市域（562km²）をもつ市であり豊かな自然が美しい市である。市庁舎は豊富な林木をふんだんに使ってあり豊かな気分になれる庁舎である。

また、全国レベルの強さを誇る高校スポーツが多数存在する小林は、スポーツのまちであり、各種スポーツ施設が充実している。これらを背景に幼少期から高齢者に至るまでの生涯スポーツを推進できるのは市民のスポーツに対する意識が高いからであろうと思われる。

市民参加型の大運動会や、駅伝大会、マラソン大会などが継続して開催されていることは、年々参加者の減少している土浦市に比べて大きな違いを感じた。

また新規事業として、年長から小学校低学年を対象にスポーツの楽しさを知ってもらいスポーツ選択の機会を創出することを目的とした競技力向上事業を予定しているが、これらも指導体制が充実しているからと思われる。ただ子どもたちに過激な負担にならないよう期待したい。

【平石勝司議員】

小林市は、スポーツのまちとして、全国7回の優勝を誇る小林高校駅伝部が有名であるが、他にもバスケットボールやハンドボールなど全国大会で活躍する高校スポーツ活動が盛んである。人口規模は本市と比較して、約3分の1だが、体育館施設はとても充実している。さらに、同市では「スポーツ推進計画」を策定し、生涯スポーツに重点を入れ、69回を数える「こばやし駅伝競走大会」をはじめ、様々なスポーツ大会の開催し、子供から大人まで世代を超えて多くの市民がスポーツに親しむ機会を創出している。人生100年時代が到来し、生涯にわたりスポーツを楽しみ、健康寿命を延ばすことにつながっていく同市の取り組みは参考になった。

【目黒英一議員】

小林市は土浦市の1/3の人口でありながら、多くの優秀なスポーツ選手を輩出しているのは何故かと？興味を持ちながら説明を受けました。やはり物心がつく頃から常にスポーツを身近に感じられる環境にすることが大きいのかと思いました。兄弟、両親、祖父母が何かしらのスポーツをしており、市民総出のスポーツ大会が年に数回行われて、各地区に体育館や運動広場がある環境。

小林市の目指す生涯スポーツ「いつでも」「だれでも」「どこでも」「いつまでも」

スポーツに親しめる環境を整備し、豊かなスポーツライフを実現することで、スポーツを通じた地域コミュニティを推進する。この取り組みの説明を受け、小林市＝スポーツのまち

という事が良く分かりました。また自然豊かで土浦市の4.5倍の面積がある、小林市は合宿するにも最適な場所だと思いました。





視 察 先 宮崎県西都市 西都市役所

視 察 日 令和2年月6日(木) 9:30~11:00

視察目的 平成21年に東米良グリーン・ツーリズム協議会と西都原グリーン・ツーリズムの会が一本化し、新たな実践者を加え、西都市内全域にわたるエリアの活動としてスケールメリットを活かした展開とするために、西都市グリーン・ツーリズム研究会を設立しました。地域区分ではなく宿泊部、体験部といった受入区分毎に編成し、またワンストップ窓口として商工観光課観光ツーリズム係に事務的を設置し、西都市観光協会や宮崎県立西都原考古博物館等、様々な関係機関の協力を得ながら質の高いグリーン・ツーリズム商品の開発、提供の取り組みを伺います。

視察内容 グリーンツーリズムについて

説 明 者 西都市グリーン・ツーリズム研究会



①西都市について

宮崎県で6番目の面積を持ち、ほぼ中央部に位置する。市域の7割が山岳地帯である。日本最大級の古墳群である西都原古墳群で知られている。産業の中心は農林畜産業でピーマン（生産量日本一）、しいたけ、にら、マンゴーが主な産物。
面積 438.79 キロ平方メートル 人口 29,035 人（2020年1月1日現在）

②西都市グリーン・ツーリズム研究会

会員数 : 51 名
農家民宿 : 9 軒
農家民泊 : 17 軒（教育旅行に限る）
受入最大人数 70 名程度

受入実績

年度	延宿泊者数	団体数
2013	315	17
2014	495	22
2015	723	18
2016	1065 (730)	23
2017	981 (749)	18
2018	883 (566)	17

*（ ）内台湾教育旅行

2019年度は見込みで1300

③台湾教育旅行受入実績

西都市童子丸在住 台湾北東部 羅東鎮出身の黒木萌々華さんの尽力により 2013 年度に初めて 1 校 39 人の教育旅行の受け入れが実現。

その後友好親善宣言などを経て 2020 年 7 月姉妹都市となった。

台湾教育旅行受入実績

2013 年 1 校

2014 年 4 校

2015年 10校
2016年 11校
2017年 12校
2018年 9校

④予算について（平成31年度当初）

・一般会計（一般財源のみ 国・県からの補助金はなし）

グリーン・ツーリズム推進事業	4,622千円
内訳	
・職員手当	815千円
・臨時職員賃金等	1,671千円
・旅費	1,092千円
台湾誘致旅費 3名（職員2名、通訳1名）x2回	
・補助金	1,750千円
研究会事業費補助金	1,000千円
民宿推進事業補助金	750千円（改修工事等の補助）

・観光協会補助金

教育旅行受入促進事業 2,000千円
→教育旅行宿泊費補助（1名分）2,000円/1泊（上限3泊）

中学生以上 1人当たり平均費用

1泊2食 6,500円

体験料 1,000～1,500円

昼食代 700円

⑤体験学習プログラム

・農業体験

時期により農作物、農作業は変化、施設・露地野菜、果樹など種類は豊富

例) ピーマン、稲作、ゴーヤ、さつま芋、みかん、ブルーベリー、ぶどう、ゆず、しいたけ
畜産業など

・食（郷土料理）の体験

そば打ち、樫の実こんにゃく、柚子胡椒などの田舎料理

わけしこ（鶏ごぼう）飯などの郷土料理、地鶏さばき、石窯ピザなど

- ・クラフト体験

わらぞうり、竹細工など昔ながらの匠の技の体験

- ・歴史文化を学ぶ

日向神話の記紀の道や国分寺、西都原古墳群など歴史文化を学ぶ

西都原考古博物館などの施設

⑥安全・衛生講習

- ・救命講習（消防署による講習）

急病やケガの応急処置、AEDの使用法、心肺蘇生、その他緊急時の対応

- ・衛生講習（保健所による講習）

食品衛生管理、旅館業の衛生について

- ・台湾語講習（黒木萌々華さんによる講習）

日常で使う簡単な台湾語講座 あいさつや体調管理について

- ・料理講習（会員による講習）

受入時の料理について

<体験モデルプラン>

1日目

- ・午前 入村式・対面式 宿泊先の農家さんとの対面や西都市の紹介をします

- ・午後 農業体験・体験学習 農作業の体験

- ・宿泊 農家民宿 夕食を農家さんと共同調理し、一緒に頂きます

2日目

- ・午前 郷土料理体験 指導を受けて郷土料理を作ります

- ・午後 農業体験・体験学習 農作業体験や出荷場、加工場の見学をします

- ・宿泊 農家民宿 農家さんと田舎、農業について語る

3日目

- ・午前 歴史、文化探訪 ボランティアガイドによる古墳群散策の後、勾玉や縄文土器づくりを体験

- ・午後 体験、学習報告 体験、学習した内容や感想を各班で発表

- ・離村式 お世話になった農家さんとのお別れ

⑦今後の課題

- ・新規会員の発掘、育成

現会員について高齢化が進んでおり、宿泊受入に支障が出てきており、新規会員の獲得が急務となっております。

・効果的な誘客、誘致活動

旅行商品の企画造成とあわせて、様々な媒体を活用した集客効果の高い広報宣伝ツールを開発する必要があります。また企画募集型旅行商品を提供できるよう旅行業の資格取得も視野に置き検討を進めつつ、エージェント等関係機関との連携による誘客、誘致も推進していく必要がある。

・自主財源の確保

西都市グリーン・ツーリズム研究会として将来的に自立するために、会費は勿論のこと、各種受入手料の適正化やふりかけ等のオリジナル商品を開発し販売による自主財源確保に努める必要がある。

主な質疑応答について

Q 台湾の学生の受入での問題点は

A 言葉の問題、意思疎通が難しい時もある。スマホの翻訳アプリや漢字を使って対応。
黒木萌々華さんの台湾語講習で言葉、文化を学ぶ。

Q 農家の方がグリーン・ツーリズムを受け入れるいきさつは

A 子供が跡を継ぎ余裕が出来た。(60代後半が多い)

Q 農家の方が受け入れる上での問題点は

A 本業が忙しく若い世代がない。受け入れの際、本業がストップして収入減になる。

Q 体験学習のプログラムの作成はどのようにしているか

A 旅行会社にプログラム作成を依頼している。その他体験学習以外の観光のプログラムも依頼。

Q 過去にどんなトラブルがあったか

A 忘れ物が一番多い。宿を抜け出すことも多く、過去に学生が川で溺れて助けに行った方が亡くなった事故があった。それ以降受け入れの際は消防署、救急病院へ届け出を出すようにしている。

Q どんな感想が多いか

A 農家の方からは西都市の役に立ててうれしい。子供たちとの交流が楽しい。
生徒たちからは田舎暮らしの体験が出来て楽しい。ごはんがおいしい。

Q 体験学習以外の取り組みは

A 教育委員会が西都市内の小中学校へマッチングスタイルの交流を企画。
地元の児童と一緒に掃除、給食などを体験する。

Q その他問題点は

A 受け入れ先の高齢化や本業が多忙になり年に1~2件廃業している。(同時に年1~2件増えている)台湾との交流で、黒木萌々華さんの負担が重くなっているため後継者誕生が急務。

所感について

【吉田千鶴子議員】

西都市は、2013年度からグリーンツーリズム事業を実施し7年目となる。特徴として台湾教育旅行に力を入れる。国際旅行研究会に参加しプレゼンし誘致しています。学校教育のアクティブラーニングが重要視される中注目される。

また、台湾出身で西都市に移り住んで20年となる「黒木萌々華さん」が第二の故郷となる西都市と台湾の両自治体の懸け橋となり姉妹都市締結に貢献され、

「西都に恩返しするため、故郷から観光客を呼び込めれば」と紹介いただきました。

とても人情に溢れた土地柄ならではのグリーンツーリズムを勉強し本市においても参考としたい。

【福田一夫議員】

西都市のグリーンツーリズムは恵まれた自然や歴史文化を活かした体験プログラムと農家民宿を中心としたものである。人と人とのつながり、都市と農村のつながりを広げ、交流を深めることを目指している。

市街地近くの西都原地区と自然豊かな東米良地区の2つの地区に分かれるが、農家の特徴が様々で豊富なメニューが用意されているのが印象深い、学習体験プログラムにしても都会では経験できない体験は貴重な思い出となろう。

また西都市産の食材の豊かさもこの事業の成功の一つの要因であろう。受け入れている教育旅行は台湾の学校が多いが、もっと国内の学校が増えてもよいのではと思われるが、国内の学校にはまた周知が弱いのであろうか。

台湾の学校との懸け橋となった黒木萌々香さんの存在は大きなものであろうと思われる。

【平石勝司議員】

西都市には、平成16年設立の東米良グリーン・ツーリズム協議会や平成18年設立の西都原グリーン・ツーリズムの会といった組織があり、平成21年に組織を一本化して、西都市グリーン・ツー

リズム研究会を設立した。商工観光課にワンストップ窓口として、事務局を設置し、一体になって取り組んでいる。会員数は51名で、農家民宿が9軒、農家民泊が17軒で平均年齢は60代後半で、高齢会が課題である。特に台湾からの教育旅行が多いのが特徴である。モノ消費からコト消費へと、国内市場だけでなく、インバウンドの市場でも体験型の観光は注目されているとのことだが、農家民泊を通しての体験学習や特に地元の方との交流は素晴らしいと感じた。受け入れの農家の方の高齢化など課題はあるとのことだが、担当者の方の貴重なお話はとても参考になった。

【目黒英一議員】

西都市は古代史跡と自然あふれる場所で、グリーン・ツーリズムに最適だということが良く分かりました。東米良と西都原でそれぞれ活動していたグリーン・ツーリズムの組織を平成21年に一本化してスケールアップしましたが、西都市グリーン・ツーリズム研究会という名称通り、西都市のグリーン・ツーリズムの取り組みを常に研究して、更に良くしていくという意気込みも説明を受け更に伝わってきました。特に台湾の学生の受け入れに力を入れている事には非常に興味を持ちました。2013年から台湾の学生の受け入れが始まってリピーターの学校も増えているのは、民宿・民泊の農家の方のおもてなしが実を結んだのだと思います。国や県の補助金もなく一般財源でやり繰りしてきたグリーン・ツーリズム研究会の努力も本当に凄いと思いました。限られた財源、観光資源を最大限に利用して結果を出す取り組みは見習っていきたいと思います。

